

「大竹駅」、私の思い出

Memories of Otake Station

PART 1



大竹駅にまつわる思い出を募集すると、みなさんから手紙やメール、写真が寄せられました。駅という人が行き交う舞台には、いくつものドラマが生まれます。それぞれの胸に残る思い出のページをめくってみることにしましょう。

昭和12年7月に勃発した日中戦争。昭和13年2月、物言わぬ遺骨となって帰還した兵士を雪の駅頭で迎える人々。(村井浩さん提供)



戦争に突入していくと、大竹町でも多くの在郷軍人が召集された。昭和12年9月大竹駅は出征兵士の見送りでごった返した。(村井浩さん提供)

8月6日 けが人で混雑した駅

浴 恵子さん(立戸)

昭和20年から26年春に呉へ転勤になるまで、父は大竹駅に勤務していました。私は小学生で駅横の官舎に住んで走り回って遊んでいました。父は列車が入り出すたびに、ホームに出て懐中時計を見ては合図をしていました。

空襲で岩国陸軍燃料^{なわりのしょう}廠が燃えたとき、駅前広場の地下壕を出ると空が半分黒くなっていたことを忘れられません。

8月6日の夕方は、多くのけが人が運ばれ駅は混雑していました。どうしてこんな酷いことが起きたのかと目を覆ったものです。

戦後は引き揚げの軍人さんたちで駅前にはぎやかになり、夜は大きなライトが照らされました。後に民間人の引き揚げで近所の人たちと一緒にレンガを積み、大釜で炊き出しをして喜ばれました。

引き揚げの人が私に「ほっぺが林檎のようね、引き揚げの子は船酔いで青ざめていますよ」と言われたことを覚えています。

今でも大竹駅に行くたびに、戦後の不自由な時代を家族が元気で過ごした日を懐かしく思い出します。



昭和38年ごろの駅舎。駅前には、徳山ポート、広島競輪の立て看板が見える。現在建築中の新駅舎あたりにあった。(村井浩さん提供)

大竹駅の改札口

仁田 茂さん(南栄 元広島駅長)

昭和46年の初夏のころ、ちょうど私は国鉄中国支社の管理部門で勤務していました。当時、国鉄は輸送力拡充の時代でした。その中で大竹駅の駅舎改築計画の合議書類を担当者が持参、決裁を求められました。図面を見ますと、現在の改札口付近が上り列車も、下り列車も階段利用で跨線橋を渡る案になっていました。

上り方面のお客様が、わざわざ跨線橋を上り下りしていただくことは、大竹駅の場合納得がいかない。エスカレーターか、エレベーターを付けるか、または応急措置として廃材の電柱を工面して暫定的に橋を渡す。建物の壁は取り外し、通路面はアスファルトで上塗りし…。お客様

出征兵士を見送った駅

岩田 好弘さん(本町)

ガタンと大きな音がしたのでびっくり。立ち止まって見ていると上り出発信号機(腕木式)が降下し進行が表示されたのでした。間もなく「C53型蒸気機関車」にけん引され客車が近づいてきました。

窓から2人、「武運長久」祝出征…のタスキを掛けた兵隊さんが盛んに手を振っています。上りホーム側に

に負担が掛からないような通路・構造物、建物を作って欲しい…と、控えめに注文を付けたことでした。お客様の間場としても、改札口から先、数メートルのところに上りホームへ階段を利用するよりも、短い距離で労力を少しでも掛けず利用できるようにして欲しいのは当然と…。やがて素人的な話のそのとおりに出来上がっているのには、こちらがびっくり、恐縮した次第です。

あのころから、既に50年が過ぎています。いまだ堅固にそのままをご利用いただいています。また、うれしいことには、新しい駅舎にはエレベーターも設置されると伺っています。ご安心の上、今後ともお友達をお誘いあわせの上、再々のご旅行等、JRをご利用のこと現職に代わりお願ひ申し上げます。



昭和47年3月15日のダイヤ改正で、特急『はと』が1日2本停車することになった。日の丸を振って初停車を出迎えた。



昭和49年2月6日、現駅舎の落成式が行われた。当初は青っぽい外観。ボックス型の改札口で、当時の二階堂哲朗市長がテープカットをして祝った。当時の大竹駅は1日約8,700人の乗降客数があった。



キオスクで買う少年ジャンプ

中林 誠さん(東栄)

大竹駅の思い出は、今から36年前にさかのぼります。当時高校生だった私は毎朝新聞配達をしていました。新聞配達↓学校↓岩国の「お好み焼きの徳川」のバイトをループしていたのを覚えています。学校も広島工業大学附属広島高等学校に通っていたので、朝は大竹駅から廿日市駅まで、夕方は大竹駅から岩国駅まで通い、バイトに明け暮れていました。そんな私の楽しみは漫画を読むこと



昭和42年の駅前。駅前で喫茶店や食堂などを営んでいた丸山商店。(丸山光代さん提供)

とでした。週刊少年ジャンプが大好きだった私は新聞配達が終わると、大竹駅のキオスクで、ジャンプが発売しないか店員さんに伺うと、「火曜発売だから月曜日に入るよ」って言われました。しかし「月曜に購入しているのだったら内緒だけど、日曜日に入るから買いに来んさい」って言われたことが大変嬉しくて、新聞配達が終わると、3年間毎週日曜日に買いに行っていたのが懐かしい思い出です。現在でも仕事で通うのに毎日大竹駅を利用してしています。

あこがれの定期券

山崎 敦子さん(岩国市)

大竹高校在学中の通学手段は徒歩でした。クラスメイトの中には宮島口方面から通学する友人もいて、下校の際は、大竹駅までおしゃべりしながら歩き、そこで別れました。さよならの挨拶を交わした後、改札口で定期券を差し出す友の姿が、なぜかかっこよく見えました。卒業後、広島の短大に進学し、念願の女子大生になれた時、真っ先に頭に浮かんだのは、大竹駅から広島駅までの定期券が購入できることでした。普段の通学はもちろん、休日には

地

元待望の東口です。これができると栄地区の人の流れが変わってくると思います。今は駅に電車が停車していると、すぐ南側の郷水第2踏切の遮断機は、長く下りたままになっていたりすることがあります。栄地区の利用者は、踏切を通らなくても駅に行くことができるようになるので、利便性が高まるのではないのでしょうか。

また、エレベーター付きの橋上駅と自由通路ができることで、お年寄りや障害のある方も随分楽になるのではないかと思っています。今の駅で下りの電車を利用するときは、いったん跨線橋を渡らなければなりません。

まちのことを考える機会でした

大竹駅西口交流広場の活用方針 策定ワークショップ参加者 岩崎 静穂さん



一駅が変わる まちが変わる

ません。ひざの具合が悪い人は、上り下りが大変でしたから、エレベーターのある和木駅まで行って戻ってきたりするという話も聞いたことがあります。新駅舎ができることを見込んで、栄地区の宅地開発も進んでいるようです。住宅を購入する若い年代の人が住んでくれば、さらに栄地区が活性化するのはないかと期待しています。長年の夢だった駅舎が完成したら、地元としても何かお祝いの催しができるといいなと私自身は思っています。

のかなと思うのです。

もちろんそれぞれの意見のメリット、デメリットを検討しながら話し合いで、自分たちの考えたものが全部実現できるとは思ってはいませんが、意見の中にあつたようなイベントにも使える屋根付きのスペースができるのはうれしいです。みなさんすごく活発に意見を出されて盛り上がったワークショップでした。新しい駅舎や交流広場をみんなが、こんなにも楽しみにしているんだなあと感じました。

まちのことを考え、夢が語れるような機会をつくってくださって、本当に良かったです。



昭和45年、駅前のロータリーの花壇で奉仕活動をする大竹高校家庭クラブの生徒たち。

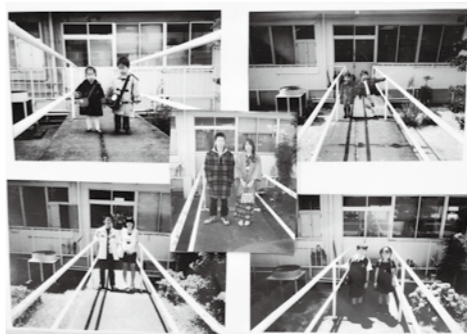
西条の友人と広島駅で待ち合わせ、ショッピングなどを楽しみました。私の青春時代の一コマを語る時、大竹駅がいつもそこにあります。

駅のポスターが夢をかなえた

中林 文愛さん(東栄)

大竹に引っ越しをして間もなく、岩国駅まで通勤をしていました。ある日大竹駅に貼り出されていたポスターの新鮮な乗務員の姿に、爽やかな姿を見ました。その時に幼き日に思い描いていた姿を思い出し、パーサーの面接に応募しました。思えばあの時、とても厳しい面接で辛く感じましたが、何度かの面接を

経て、無事中途入社の内定をいただくことができました。毎日、大竹駅から通勤をし大阪駅や博多駅、岡山駅、西日本方面を受け持ち、業務に邁進しています。あの時ポスターを見ていなければ、今の私もいなかったと思います。数年後、新しい大竹駅になったら、帰宅途中にカフェを満喫してみたいです。思い出もある大竹駅が新しくなり、新しい思い出もたくさん増やしていきたいです。



(平成2年～平成20年撮影) 山根 静佳さん

家族で電車に乗って出かけるたびに、大竹駅と同じ場所で写真を撮っていました。写真を撮っていた父は10年前に他界し、兄は結婚して県外に行ってしまったので、もう兄妹でこの写真を撮ることはなくなりました。この写真は家族全員の大変な思い出です。

書籍で紹介「大竹駅」

「鉄道100年記念日本の駅 写真でみる国鉄駅舎のすべて」

鉄道ジャーナル社 編集

明治5年に日本の鉄道が開業してから100年目にあたる昭和47年発行の写真集。国鉄時代の3千数百の旅客駅を網羅している。各駅の開業年、改築年、路線名などに加えて、沿線の名所・旧跡の項目もある。大竹駅は先代の駅舎の写真とともに、蛇喰磬、弥栄映、渡ノ瀬ダム、三倉岳、亀居城跡が掲載されている。ユニークなのは、職場の標語・モットーの紹介。大竹駅は『和』となっている。



「絶滅危惧駅舎 訪ねておきたい名駅舎たち」

写真と文 杉崎行恭(二見文庫)

著者が訪ね歩いた全国の名建築駅舎の本。『明治の駅舎』『モダニズムの駅舎』『神社仏閣駅舎』などに分類されている。大竹駅も『嗚呼、国鉄建築の駅舎』というカテゴリーの中で、「キレイないいフォルムの駅舎」と紹介されている。ちなみに、波波駅は『王道の洋館駅舎』で、玄関のひさしが特徴的な洋館住宅風の駅舎となっている。



大竹駅再生プロジェクト寄付者

応援メッセージ

■13歳から24歳まで住んでいました。現在は大竹市の会社に勤めており、ずっと大竹と関わっていますが、やはり故郷なので特別な思いがあります。海と山に囲まれたこの環境が大好きで、落ち着きます。ますます大竹市が住み良い街になるとうれいんです。
(広島市佐伯区)

■駅はその街の玄関だと思っています。ぜひステキな駅を作ってください。
(広島市東区)

■大竹駅前にオフィスを構えております。ぜひ駅前周辺の活性化と地域貢献ができればという思いで協賛させていただきます。
(廿日市市)

■みんなが使いやすい駅になるといいですね。
(長野県安曇野市)

■自分が関係している会社の工場があります。発展を祈ります。
(東京都新宿区)

■きれいで便利な駅に生まれ変わるのを楽しみにしています。
(横浜市青葉区)

■大竹市生まれなのですが幼少時に引っ越したので記憶がなく、生まれて40年以上たった約10年前に電車で通り過ぎて駅を見ました。たまたまクラウドファンディングに出会いましたので寄付させていただきます。いつか大竹に訪れてみたいと思っています。
(東京都世田谷区)

■大竹駅の再生に役立ててください。
(岩国市)

■生まれ育ち、そして生涯を捧げるだろう我が町、大竹市のために、わずかでも貢献したいと思います。
(大竹市)



品と一緒に新しい駅を飾ることで、駅の歴史に足跡を残すことができるのではないだろうか。自由通路ができることで、東口の栄地区にお住まいの方や、通勤で事業所にお勤めの方は、利便性が高まるのではないだろうか。ぜひ、市外から駅を利用されている方にもご協力をお願いしたいと思っています。そう呼び掛ける杉山課長補佐です。

プロジェクトへの寄付は、令和4年3月末まで受け付けており、インターネット、または市役所、各支所に備え付けの用紙からも申し込みができます。

ガバメントクラウドファンディング Government Crowd Funding (GCF)

ガバメントクラウドファンディングは、ふるさと納税を利用して、地方自治体が特定の目的のために出資を募るもの。寄付金について税控除が適用される。大竹駅再生プロジェクトは、これに該当する。

大竹駅再生プロジェクト寄付額 (令和元年12月1日~令和3年10月31日)

63,186,000円

教えてタテイシさん 大竹駅関係の財源って？

クラウドファンディングで寄付を集めているということですが、大竹駅周辺整備事業というのは、いくらくらいかかるのでしょうか。財政担当の建石尚男主幹に聞きました。

「事業費は約51億円で、その財源内訳は、国の交付金が約4割、市債(借入金)が約3割、一般財源が約3割です。一般財源は大規模事業に備えて、これまで積み立ててきた基金(地方創生事業基金)を主に取り崩します。この基金にクラウドファンディングの寄付金も含まれています」。



市内の企業・事業者の方へ
ふるさと納税返礼品の募集

問い合わせ 総務課 ☎59-2120

市は、ふるさと納税返礼品として贈呈する商品などを、随時募集しています。返礼品は、次のいずれかに該当するものなどが対象になります。

- 市内で生産されたもの
- 市内で返礼品の原材料の主要な部分が生産されたもの
- 市内で返礼品の製造・加工など主要な部分を行うことで付加価値が生じているもの
- 市内で提供されるサービス

興味がある方は、総務課までご連絡ください。

みんなの思いが駅を変える

大竹駅再生 プロジェクト

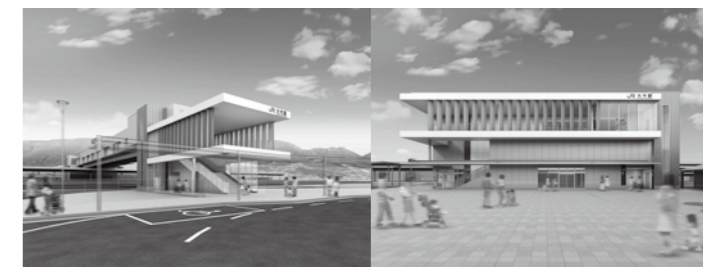
クラウドファンディング

— 来年3月まで受け付け —

問い合わせ
総務課 ☎59-2120



ふるなびクラウドファンディング



大竹和紙を生かした作品に

広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科講師 青木 伸介さん



広島市立大学社会連携プロジェクト採択事業『和紙と漆の壁面装飾タイル』(部分)

昭和49年の建設から47年が経過し、老朽化した駅舎。今の時代にふさわしい駅舎に生まれ変わらせるとともに、長年の懸案だった東西のまちを結ぶ自由通路や駅前広場を整備しているところです。自分たちのまちの駅の再生を応援し、愛着が持てるようにとの思いも込めて、ふるさと納税の仕組みを使った公共が行うクラウドファンディング『大竹駅再生プロジェクト』を立ち上げています。

プロジェクトについて、窓口となっている総務課の杉山課長補佐に聞きました。

「令和元年から始めていますが、市内の方や企業から寄付をいただいています。市外の方は、ふるさと納税の返礼品をお送りすることができませんが、市民の方には制度上返礼品を送ることができません。そこで何かの形でみなさんの善意を表わすことができないかと考えました。それが自由通路のスペースを利用した寄付者のネームプレートです」。

広島市立大学芸術学部講師の青木伸介さんに依頼しているネームプレートは、大竹の手すき和紙を使ったものを想定していると聞いています。自分の名前が、大竹の伝統工芸

大竹駅再生プロジェクトで寄付された方への感謝の意味を込めて、駅の自由通路の壁面に設けられたスペースに、記念となるようなものを飾ることができないかと発案されたのが、漆と和紙を使った造形物。そこに寄付者の名前を入れていくといえます。その造形物の制作に取り組んでいるのが、漆造形の作家であり広島市立大学芸術学部で学生の指導にあたってある青木伸介さんです。この日も学生たちを連れて、防鹿の『手漉き和紙の里』で実習をしているところでした。

自由通路に飾られる造形物は、どのようなものになるのか伺いました。「木製のパネルに和紙を張り重ねたものに、漆を塗ったタイル状のピースを組み合わせた大竹和紙を生

かした作品で、この地域にある自然をモチーフにしたものです。木々や、海や川の水、草花、昆虫、それに人の生活、大竹の工業地帯、そういったものをイメージしています」。

昨年開催された『ひろしま県民文化祭』では、広島市立大学社会連携プロジェクトとして出品(写真)。こいのぼりやコウゾなどをデザインした作品で、これが今回自由通路に飾る造形物の原形のようなものかもしれません。

作品の中に、どのように名前を入れていくのか、青木さんも構想中のようにです。年内にはデザイン案を作り、来年制作に入る予定とのことでした。

どのような作品が、自由通路にお目見えするのか、今から楽しみです。